

習主席の「縄張り提案」拒んだオバマ氏

2014年 7月 18日
日経電子版

編集委員 秋田浩之

中国はとてメンツを重んじる国だ。ところが、世界が見守るなか、楊潔篪国務委員（副首相に相当）が、ケリー米国務長官の面目をつぶしかねない言動に出た。

■ケリー氏の面前で米国批判

さや当ての舞台となったのは、北京で開かれた米中戦略・経済対話の閉幕式。代表を務めたケリー、楊両氏らが9～10日の会議を終え、記者団を集めて会見した。

気まずい雰囲気になったのは、楊氏が発言したときだった。

「中国は断固として、東シナ海と南シナ海での主権と権利を守る」。彼は、尖閣諸島や南沙諸島問題を念頭にこう切り出し、さらに続けた。「米国には、客観的で公正な態度をとるよう求める。どちらにも肩入れしないという原則を守ってほしい」

この間、同じ壇上に立っていたケリー氏は、苦虫をかみつぶしたような表情をしていたという（7月11日付、読売新聞朝刊）。

それもそのはずである。これに先立って発言したケリー氏は、中国への配慮から、あからさまな対中批判は避けたからである。

サイバー問題にはふれたが、米中の火種になっている東シナ海や南シナ海問題には深入りせず、中国との環境協力の成果などを強調した。それだけに、楊氏にはしごを外された格好だ。

では、なぜ、楊氏はあえてケリー氏の面前で、米国批判を展開したのか。まず理由として考えられるのは、9～10日の会議で、東シナ海と南シナ海問題をめぐって激しい応酬となり、米中の溝が埋まらなかったことだ。この結果に不満を抱き、閉幕記者会見の機会までとらえて、不満を表明したというわけだ。

米側によると、ケリー氏は一連の会議で、海洋における中国の行動に懸念を表明。力による現状の変更を認めない立場を強調した。尖閣諸島が日米安保条約の適用対象になることも、改めて伝えたもようだ。

だが、中国としてもこうした応酬はある程度、予想していただろう。楊氏の背中を押したのは、もっと大きな理由にちがいない。そのヒントになるのが、会議初日の9日のできごとだ。

この日、習近平国家主席が冒頭に登場し、約15分間にわたって演説した。10回近くにわたって「新型の大国関係」という表現を使い、米側に関係の強化を促したのだ。

昨年以來、習氏は再三にわたってこの提案を米側に投げてきた。中国側によると、「新型の大国関係」とは、互いの立場や核心的利益を認め、尊重する関係のことだ。

米国は、尖閣や南シナ海などをめぐり、中国の権益を認める。

その代わりに、中国も中東政策や対テロ戦などで米国に協力する——。分かりやすく言えば、習提案とは、互いの縄張りを尊重し、持ちつ持たれつでやっていこう、というものだ。

しかし、同じ9日、オバマ大統領は習提案をばっさり切り捨てた。

「私たちは『新型の関係』を築くという目標を、中国と共有している。そのような関係は、実際の協力を増やし、立場の違いを建設的にコントロールすることによって築かれるものだ」オバマ氏は今回の会議に際し、こんな声明を発表した。あいまいな文章だが、言わんとしていることは明白だ。習氏がかけられる「新型の大国関係」は受け入れない、と言っているのだ。

■「大国関係」は使わず

最大のポイントは、「新型の関係」(new model of relations)という言葉。「大国関係」という言葉をあえて使わないことで、米中関係を特別視せず、中国との“縄張り分割”にも応じない姿勢を鮮明にしたといえる。

オバマ政権は昨年秋、いったん、「新型の大国関係」の構築に応じるかのようなそぶりを見せた。ホワイトハウス首脳が演説や会見で相次ぎ、このフレーズに言及した。

だが、その後には待っていたのは、中国による昨年11月下旬の防空識別圏(ADIZ)設定。米政府当局者は「オバマ政権が歩み寄りつつあるという印象を、習政権に与えてしまった」と振り返る。

オバマ氏の今回の声明には、「中国とアジアの勢力圏を取引することはない」(同当局者)という立場を、改めて明示する狙いがあった。

中国指導部もさすがに、米側の真意を理解したにちがいない。だからこそ、楊氏はあからさまなけん制球を、米国に投げたのだろう。